

無口な背中

大宮路 夕子

私は幼い頃、多くの時間を祖母のいる田舎で過ごしました。

祖母は、農家を営んでいました。

私の家のあった山の麓の町から山頂に向かってバスで20分。更に大きく縫うように蛇行した山道を、喘ぎながら15分ほど歩き奥山に達すると、すっかり景観が変わるところでした。

祖母は明治生まれの女性らしく寡黙でいつも黙々と、そして淡々と働いていました。

私は祖母が手をたたいて喜ぶだの、激怒するだのといった人間らしい感情を顕わにしたのを、今まで見たことがありません。

普通は孫が来ると「まあ〜！」とか「あら〜！」などと感嘆し喜び、小遣いをくれたり、目一杯甘やかしたりするものでしょう。しかし、小さな私の思い描く祖母と孫の幸福のワンシーンは儂くも数秒足らずの間に「来たか〜」の一言でリアルに引き戻されてしまいます。

その後は大して気にも留めずに薄汚れた手ぬぐいで頬被りし、長年着込んだペラペラの着物のいでたちで、裏山直送の年季の入った竿竹に腰巻を干している後姿がそこにありました。どのような時も、祖母の感情はいつでもニュートラルでした。お年玉をくれるときも、久しぶりに訪ねたときもニュートラルから切り替わることがないのです。そんな感情のぶれの小さい祖母でした。

私が物心ついた頃はすでに祖母は体に障がいを抱えていました。

2本の松葉杖が、祖母の体に自由を与える全てでした。というよりも体の一部になっていました。右の歩先を一步出して右足を前に出す。そして左の歩先を一步出し左の足を一步出すといった具合に歩調をとっていました。両の脇で松葉杖をすっぽりと抱え込みその身を委ね、首をもたげている体勢を長年続けたせいで、祖母の背中はずっかりダンゴ虫のように丸まり、成長している私とは対照的にまるで松葉杖と共に体も縮んできているかのようでした。畑仕事の帰り一緒に歩調を合わせるとどつぶり日が暮れてしまいそうです。じりじり、もじもじとしながらも、祖母の後を付いて行ったものでした。

おばあちゃんの体に何があつたのかと障がいを意識し始めた頃、私は祖母に聞いたことがあります。祖母は相変わらず淡々と、そのいきさつを実に手短かに教えてくれました。

それは祖母が私くらい歳の頃、田んぼの畔から溝に落ちたということ。溝といつてもたかだか30〜40センチ程の深さだった。そこで祖母は両方の大腿骨を折ってしまい、今でも金具で骨をつないであるという事でした。田植えのお手伝いに行くときよく遊んだ馴染みの水場。そのようなところで祖母は大怪我をして、以来生涯を松葉杖というパートナーと共に過ごしてきました。

パートナーと言うと、20年前は祖父も生きていました。

ただ同じ屋根の下に住んでいながら、全く別々の生活をしていました。私は祖父母の会話を一度も耳にしたことがありませんでした。祖母に限らず、母や叔父、叔母も祖父と話すことは殆ん

どありませんでした。ですからうまくは言えませんが、私もその掟に暗黙のうちに従っていました。

祖父母はそれぞれに、おおよそのテリトリーが決まっていました。祖父の陣地は唯一土間の一角と掘りこたつ、猫も寄りつかないようなジメツとしたおおよそ畳分のベッドが置かれたスペース。心細い空間でしたが、祖父の意地がそうさせたのか出入り口近くの人の往来の多い場所に木製のほこりっぽい机と汚いガスコンロが置かれてあり、祖父はそこで自炊をしていました。しかしご飯だけは祖母の炊いたものをよそいくるのですが、その間3メートルほどの土間をつたって祖母の陣地に仏頂面さげて、片手には茶碗も下げてご飯をさつさとよそようと、背後の静けさに耐えながら祖父はいそいそと自分の陣地に引っ込んでいきました。

掘りコタツは祖父が使っていました。というより祖母は悠長にコタツに入りまどろんでいるような人ではなかったのです、おのずと祖父の専売特許になっていました。私が祖父からお年玉をもらうときも大概は掘りコタツに入っているとき。祖父が入っている向かい側に私が入ってくると、おもむろに手渡されるので遠慮がちに「ありがとう」を言うと、この時だけは祖父の仏長面がほころぶのです。

それでも祖父のベッドに年中張られていた蚊帳は文字通り、蚊帳の外と言う妻や子供たちとの冷え切った関係を象徴しているかのようでした。祖父母の子供たち皆が、祖母の陣営におり味方していました。

この理由については未だに知りませんし、私も小さいながらも聞いてはいけないという空気は読めていたようで口にしませんでした。ただ祖母は現代の「家庭内別居」を先取りで実践していたという事実のみ残っています。

そうしていつだったか、見たことのないどこかのおばあさんがふと訪ねてきたときのことでした。私が祖父の孫と知ると「金蔵さん（祖父の名前）はここらでは評判の色白の、鼻筋の通ったよかにせ」（ハンサム）じゃった」と繰り返し語っていました。すっかり老いて頭髮も真っ白になった祖父でしたが、やせても枯れても名残はやはり残るもの。その言葉は私の中で現在までリフレインされ、憶測が憶測をよんでいます。

そのような夫婦関係に至ったにも拘らず祖母は、かつて10人の子供を生み、とても頼りにしていた長男を戦争で亡くしながらも残った子供たちを育てました。そして晩年になってもあの広大な田畑を實に見事に実らせました。牛を育て子牛を生ませ、多くの鶏の世話をしました。そして田植えや稲刈りの時期になると、自力で地下足袋を履き、畔道の斜面を降りてくると松葉杖ごとドリと重たい水田の中に入っていました。

晩春の頃は茶葉を摘み祖母が摘んだ葉をかまどで炒ります。他にも味噌やしょうゆ、梅干、こんにゃく、ちまきなど今では懐かしい味です。祖母には生きていくための知恵がありました。

私は母とは些細なことで罵り合ってきた生活を送ってきましたが、あの祖母に対してだけは逆らえませんでした。何を言っても祖母の返答は「じゃっとや（そうか）」なのです。祖母はそれ

以上言及することをしませんでした。ですから話がちつとも深刻にならないのです。

鹿兒島では古くから親のしついで「議を言うな」という言葉が日常的に使われます。これは「どのこののと屁理屈を言うな」ということ。そしてもうひとつは「泣こかい飛ばかい。泣くよかひっ飛ばべ！」と言う言葉です。「ごたごたと理屈をこねるよりもまず行動を起こしなさい！」というひとつには叱咤激励といった意味もあります。明治生まれの薩摩の女性としてのしつけを受けた祖母でした。

いつの間にか夜明け前には起き、柄の短いほうきで畳の隅から隅を決まり通りに掃き、仏様に飯やお水を備え牛や鶏にえさを与え畑に出る。

そんな祖母も15年前にこの世を去りました。知らぬ間に高血圧になっており、ふらついた拍子に上がり框から落ちてしまい、また急所の太ももを骨折してしまったのです。思えば92歳まで他に病気なんてしませんでした。祖母が「痛い」「辛い」などと口にしたのを一度も聞いたこともありませんでした。ただ時々わか雨が降ってきた時洗濯物をいそいそと、しかしゆったりと取り入れ、しまった後は何も言わずに静かにベッドに横になることがありました。本当は体がしんどい日もあったかもしれせん。

太ももを骨折して医師が手術を勧めても拒否し、余儀なく病院で寝たきりの生活を送るようになりました。松葉杖も使うことがなくなっていました。少しずつ物忘れが多くなりいつしか私の顔も分からなくなっていました。ある日訪ねると、祖母は私の知らない祖母になっていまし

た。まるで少女のような顔で目をらんらんと輝かせ、私が初めて耳にする名前で、「○○ちゃん」と呼んできました。私が初めて目にした祖母のあどけない顔でした。その顔に苦悩も見えないのに、何かを断ち切られたような寂しさを感じずにはいられませんでした。そして祖母は病院で静かに息を引き取りました。本当に眠るように逝ったと聞かされました。

祖母が他界する2年程前に私は看護師として職に就きました。それは私の生い立ちがそうさせたのか、「食いつばぐれがない」という非常に夢のない不純な動機からでした。

ありがたくないことに、端正な面立ちではあるが全く融通のきかない頑固者で世渡りの下手な母親の性格と、お人よしで正直者だがその外見が、人類の進化の発展途上にあつた気の小さい父。私はその母の性格と父の容姿のDNAを見事に受け継ぎました。

そんな私が、郷里から随分と離れた関東地域の某病院の集中治療室に配属されました。時代はバブル全盛期とよばれ日本中が浮かれていました。

自活し人生のリセット気分の私も随分と浮かれていました。飲み屋街に行けばスーツ族が肩を組み大声で徳を説き千鳥足ではしご。大学生は居酒屋を陣取って「いっきーいっきー」と無責任にお酒の一气飲みを皆がしており、気が遠くなるまでアルコールを浴びせ歓声をあげていました。世の人々が散財することを満喫しているようでした。

祖母のお葬式にも出ず、また自力で稼いだお金とそのおごりによって、私は金銭感覚とともに祖母に対する思いまで麻痺させていきました。

その当時の社会をまるで反映するかのように、医療の現場でも延命治療と言う名の散財が目立ちました。高度医療を行うことがまるで医療従事者にとつてのステイタスとでも言うように救急車で運ばれた人達は人工呼吸器や栄養チューブでかろうじて命をつながれていました。お年寄りの中には身も心も憔悴し、その眼にさえ輝きを失った人もいました。

この頃、「老衰」と言う言葉自体、死語になつていくように使つてしまえば笑われてしまうのではないかと感じたほどでした。それでも運ばれてくるお年寄りに対して、医療従事者と言う立場で淡々と職務をこなしていく自分がいました。私は私の看護師としての力量を、そしてその成長ぶりを周知させねばならないプライドがありました。事実経験することで、看護師として知識や技術と言うキャリアを積み自信をつけていくことができました。

高度医療が正しいという希望的観測の中で葛藤することをやむやにしていました。年寄りが自分の死を目前にして、住みなれた我が家で家族に囲まれ死に水取ってもらい喉を潤し、かすかに薄れていく意識の中で「おじいちゃん」「おばあちゃん」と呼ばれ、次第に細くなる一筋の光に導かれ召されていく場所は理想郷となつてしまいました。

もはや「天命」と言う言葉は、高度医療と言う機械仕掛けの中に雲散霧消していったかのようでした。

こんな私でもお嫁さんしてくれる人が現れました。一男設けました。しかし私が思い描いていた家庭生活は理想とは違うものと思知らされました。仕事と家事、子育ての両立は家庭と職

場の板ばさみでした。

子供が病気がちだったため具合が悪くなれば保育園からの連絡で、泣きたい気持ちをごらえ、とにかく出来るところまではと業務をやり終えました。もう体より先に心だけが飛んでいました。ぐったりした息子を見たとき張り詰めていたものがふっと緩み、うわーと涙が出てきてしまいました。周囲の保育師の同情に甘えその場をやり過ぎました。その後も息子は入退院を繰り返して、公私共に病院と縁の切れることはなく、雨の日も雪の日も毎週息子を連れかかりつけの医者に通う日が続きました。

その後病弱な息子の転地療養を機に、自然の多い東京の郊外に移り住みました。年々息子の成長と共に、病院にお世話になる頻度も少なくなっていきました。

仕事も特別養護老人ホームという場でお年寄りの健康管理に携わる仕事に就きました。

どんな余生を過ごすことが幸せなのかを見つけ出す場だとも思えました。いつの間にか私はまたこんなことを考え始めていたのでした。語ることはいくらでもできますが、目の前に立ちほだかる現実や困難に淡々と向き合っていくことがどんなに大変なことだろう。

私は亡くなった祖母を思い出します。決して楽な人生ではなかったはずです。明治、大正、激動といわれた昭和の時代を生きました。両足の自由を失い、頼りの長男を戦争で失い多くを失いました。

しかし、多くの子供たち、孫たち、広大な田畑。多くのものを実らせました。決して多くは語

らず。決して感情をあらわにすることのなかった祖母。

彼女はただただ、自分の宿命にきちんと向き合っていたのだと思います。いつも気持ちをニュートラルにしなければいけなかったのでしょうか。それが祖母にとつての生きる術だったのかもしれない。そうせざるを得なかった祖母の気持ちだが、祖母が両足の自由を失った頃の年齢に達してようやく気づかされたような気がします。

そこに言葉は存在しませんが、たった1本の稲穂に、茶摘をしている人々の姿に、色黒の深く刻まれた額のしわに祖母の生き様が映し出されます。そしてその教えこそが私と祖母の絆だと思います。

現在私はお年寄りの最後の砦を、お年寄りがここに来てよかったと思えるような終の棲家をつくりたいと願う学校に行つて勉強中です。

これは決してお年寄りのためだけではなく、次の世代をお願いしていく子供たちのためだけでなく、自分自身のためでもあります。

現実仕事との両立ですから、家族にも職場の人達にもずいぶん迷惑をかけるし、習ったことをすぐに忘れてしまうため決して楽ではありません。

今年、実に悪いタイミングで自治会の当番が順番で廻ってきました。今は廃れてきた子ども会のこと、自治会の氏神様の薬師祭のこと。土着でない私には分からないことばかりで、しかもこんなに多くの責任を引き受けるとなると気が重くて仕方ありませんでした。また、私自身、首を

悪い手術のために入院しその間は仕事も学校にも行けず、お世話する側の看護師の私の立場が逆転し敗北感を感じていた私にある友人が言いました。「ピンチのときこそチャンス」だど…。

事実入院を通して、初めて患者の立場で病床に就いたとき、弱者の立場で多くのことが見えました。私はこの人達に助けられている。この人達の力が必要なのだと。人は一人では生きていけないということを改めて痛感しました。

私たち人間は先祖、家族、近隣、地域の人々、病院や様々な施設、子供たち、氏神様からいろいろなことを教わり守られていると思います。これらはひとつの円環となり、どんどん膨らんで未来に繋がっていかばいいと思います。

「お前には丈夫な足がある。本物を見る目を持ちしつかりと地に足をつけて実らせなさい」という祖母のつぶやきが言霊として表れている気がします。